

れた精薄兒教育、桃花鑿の経営にながかるものである。

先生は翌明治二十七年十月、御自分の母校佐伯尋常小  
学校の准訓導として転任となった。学歴と一か年以上の  
教育実習によつて与えられた資格であった。何年生の組  
任であつたか。その教え兒たちも、生きていれば九十支  
に近いておるうから、これも探し出すことは困難である  
う。そのころの岩淵先生皮どんなであつたか、書いて見  
たいものである。

今度は雇教師でなくて准訓導という、資格をもつた教  
師である。津井小学校での教育実習が役に立つたこと  
あるうが、何といつても正則の教員養成学校をやってい  
ないことが、次第に教壇に立つことには不安を覚えたので  
あるうか、師範学校入学を決意するに至つた。

母校に勤めること一年有半、先生は明治二十九年四月  
佐伯尋常小学校の教師を退職し、数か月勉強準備して、  
同年九月、当時大分の町にあつた大分県師範学校に入学  
した。当時の師範学校は全県ただ一校、明治九年の創校  
であつたが、佐伯方面からの入学者は數えるほどしか  
あつた時代であつた。

岩崎先生の師範学校時代の勉強生活はどうであつたか、  
先生の師範学校進学に対して、先生は家庭氏どのように  
これを支援したか。先生は第六子であり、下に尚爺さん  
達があつた。その当時の家庭事情も知りたいが、今急に  
これをつかぬ得ない。しかし、とにかく専門の教員養成  
学校に学ばようになり、教育学や心理学のような教職科  
目はもちろん、国語・漢文・英語・数学・地理・歴史・  
動物植物などの普通学科から國画・習字・工作・音楽・体  
操などの技能教科に至るまで履修したのであつた。

(つづく)

記録

龍王山に登る

昭和四十九年、羊頭初歩きの記

毎年のことながら佐伯史談会は、初歩き、と称して、新年まず山  
に登ることにしてゐる。今年は一月初二日朝、弥生町の陣田に集合、歩  
いて陣田に入り、慶の古塔などを見て、飯野をとのえ、それから水直  
村との境にそびえてゐる龍王山に登つた。

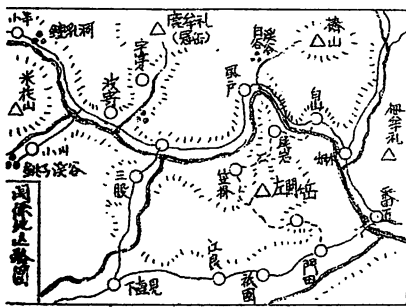
この山は、地圖では「左間ヶ岳」と出ており、標高は三三八山、けして  
高い山ではないが、佐伯からながめると西の空に黒々とそびえ、まず「か  
つ、い、い、山」であり、きれいに尖つた山頂にはNHKのテレビ塔がある  
が、そこには昔から八丈龍王をまつてゐるので、まわりの村々では龍  
王山(その呼びかたも誤つて「小お、う、さん」という)と呼んでゐる。

午前九時半、細田の村を後にして一行の頼蝕丸は、高木・子川・鎌  
田・五十川(御)・神田・藤間田・平川(南)・沢崎・赤矢・倉西・清田・羽柴・五十  
川(中)・市野瀬・加藤・同子息・宇目所から軸丸氏、はるばる遠くの別荘から  
見塩氏の総勢十八人、しかも快晴無風、なかなかの盛況である。

森やかに語りながら細田郡落から林道をたどる。手入丸のよく  
行き届いた杉林を右左に見ながら、三十分ばかり登ると小さな尾根に出た。  
すると視界が急に開けて、江良も袂園ま  
ど切畑の村界がはるかに見える。そこらに登  
りつづけると坂道はひどくなる。見上げると  
目指すテレビ塔が頭の上は高々とそびえ  
ていて、またかなり高い。八合目ほどであ  
るか。

ここで道は大きく左にめぐつて、しばらく  
登つたら、整地の跡もま少し、広場  
に出た。すると、すぐ眼下に水直村が明  
るく開けてすばらしい景観であつた。

真正面はるかに鹿傘礼(冠岳一六二七)



が、冬の陽にかがやいて懐かしい姿を見せ、右手には一朧の新年に登つ大菩薩山(六五九)が峻々とそびえ、左手には米花山(六〇六)が悠然とその大きな顔つきをまじり、そしてその右向うには、去年の初夏のころ登つた銀嶺山(七五四)、左側には遠く雲に入るように白濁境の嶺山(二六〇五)が、その特異な姿を見せている。

こゝから一連の山々を見れば、その風格を示して、比べて見ると、奥趣のさらけ湧くものがある。眼み下には、水やせき森道川の清流が曲がりくねって流れ、三股や笠掛の集落が広がっていて、一軒一軒が手にとるように近くながめられる。

私は知らなかつた。このような山並み及び川の流しが、また三百層も登らないこの龍王山の胸のあたりから、まるでパノラマを見るように一望に収められるようとは。

頂上への道は(途中でまぢがえたと見えて)、おたりにないのよんで、こゝろなく樹林にわけ入ってかなり登り、やつとテレビ塔に達した。小高い山頂には石の祠が三四並んで、おまつりした様子で全くない。しかしこゝから番立川下流一帯から佐伯市街にかけての展望はすこぶるよい。

さて、今度笠掛に下るといふことで、切畑出身の藤間田氏が道をさがしたが、尻根伝いの道はふまかつて心もなないので、すぐ下の杉林を目ざして下り、谷間の小道をたづめて笠掛の村裡に入った。

まず福円寺の江藤鑑光師の御案内で、井の鎮守天満社に参拝したが、境内に「掌徳夜殿」にほじほじまる戒名の刻まれた佐伯惟治の大きな墓のあるに、おどろいた。悲運の願主に対する遺業が、こゝろ里へにも行きわたっていることが、なせか驚かされた。一同、福円寺に立ち寄つて昼食、江藤住職のおもてなしを頂き、古市にあつた福円寺のことなど、古い寺の歴史や什器などうけたまわつた。

午後一時半、今度是小菩薩時代私より一級上の、柴田正雄氏の御案内をいれたとき、やがて尻岩峠を志した。途中峠道にそんで二十基ほどの段申塔の群立

するのを見た。なるほどこの道は昔の水道、そして中野村の入り口で、峠近くのこゝに段申塔のあつたのは当然の場所である。

尻岩峠はあまり高くない。百米を僅かに越すぐらいである。明治になつて異国風線が通過するまで、今の水直村に通ずる本道は、すべてこの峠を越して、江戸時代の藩侯が御道に入り、郡奉行の領内巡見、すべてこの峠であつた。面白いことに、尻岩側、上野方面の人々は、この峠を笠掛峠と呼び、笠掛側中野方面の人々は、尻岩峠と呼んでいるが、これはどこの峠で同じことであらう。

さて、今日の行程も終りが近くなつた。バスの時間を見計らつて、峠から下ると尻岩の鎮守天満社に参拝、水路バトンネルから水音高く日とぼしつて、今時の常盤井堤を白のあたりに見た。大直屋出納藤左又門の供養塔、壯大で「常盤源記」の記念碑など、往時の大建設事業は、その水落のさかんな水勢のように今もいっまでも続くことであらう。

私共は打ち建て川べりの道を急ぎ、建設中の大橋を渡つて白山(しらやま)に出た。十五分ほど待たると本直村から下つて来たバスの降り、いさゝかの疲れを覚えながら、でも満ち足りた思いをもつて帰路に上つた。(羽柴)

佐伯史談会

新年度役員会を聞く

去る一月十九日(土曜)午後、恒例の新年度を聞いた。

高木会長おつかひの後、村松幹事から下記のように新年度の会計の決算報告、宇川氏から監査報告の後承認、ついで新年度の研修活動も含めた運営について提案、行事の年間配当などに亘つて検討、それらに亘つての本年度の予算を審議して決案した。

尚、欠員補充として新職員に桐畑南の富沢泰氏、宇目町の柳丸秀氏、幹事に藤間田三千夫氏を決定

今年史に会員の清新な力を結集して、研修の成果を更に高め、一般市民に、若い人達にも呼びかけ、地域社会への奉仕をしいたカである。

佐伯史談会 四十八年度会計報告		四十九年度	
科目		予算額	
収入	支出	収入	支出
一 総額	四〇、〇八一	四〇、〇八一	二四、六三九
二 会費	一三、〇〇〇	一三、〇〇〇	一三、〇〇〇
三 賛助寄附金	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
四 補助金	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
五 雑収入	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
六 臨時収入	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
七 雑収入	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
計	二六、八〇八	二七、六六〇	四〇、四六三
一 会費	六、〇〇〇	六、〇〇〇	六、〇〇〇
二 研修会費	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
三 会誌印刷費	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
四 会費	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
五 雑費	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
六 備品	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
七 新修助成費	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
八 出張手当	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
九 謝礼	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
一〇 雑費	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
一一 通信費	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
一二 雑費	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
一三 予備費	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
計	二六、八〇八	二七、六六〇	四〇、四六三
収支差引	〇	一、二四六	三、九二四

(解説)

- 一 一ヶ月に一回の報告を要するが、後面の都合で省く。
- 二 会費は、前年度に比べて改定して、据置くと、従つて普通会費(年額一〇、〇〇円)、同封紙(年額一、〇〇円)を、二ヶ月に一回お支払ひをせう。
- 三 本会の会計年度は一月から十二月まで。

退会御自由

ちつとも遠慮ありません。ハガキまたは電話などで、退会なさつても御返答は有りません。又、身近なことを記事にされた場合は、撤回を呈上していただきます。つまり同会員として、名簿に氏名を載せておきます。すなわち御連絡をお願ひ申します。